

かんしょの種子播栽培法に関する研究（予報）

広崎昭太・小野敏忠

（九州農業試験場）

HIROSAKI, S. and ONO, T.

Studies on the true seed culture in sweet potato.

繁村らは、温帯地方の自然条件下で開花結実するかんしょ系統を発見し、交雑種子が容易に多量にえられるという特性をかんしょ育種に利用することの可能性を検討した（1965）。その後筆者らは、この露地開花性系統の実用形質についての選抜を行ない育種材料としての改良を進めて来た（1967）。この材料について、容易かつ多量にえられるかんしょ種子を、直接ほ場に播いて栽培するという種子播栽培法は、かんしょ作の省力化に有効であろうと考えられるので、その可能性を予備的に検討した結果の概要を報告する。

試験方法

1967年に支柱栽培で自然交雑種子を採種し、翌68年、12系統群の種子を硫酸処理し、5月15日と6月15日の2回にまいた。栽植様式は畦巾74cm、株間40cm、1株3粒播、1区7.1㎡（24株）とし、比較に農林2号とコガネセンガンを上記の播種期に植付けた。収穫は11月18日である。

試験結果と考察

種子播区は播種後3日目に発芽を始め、7日目の発芽歩合は約63%であった。その地上部の生育は、そう苗した比較品種に比べて著しく劣り、収穫時においても地面が見える程度の繁茂度であった。

試験結果は第1表のとおりで、種子播区のもも収量は農林2号（そう苗）の20%程度であった。

種子播区では、個体当りのもも個数が1～2で、そう苗区の4～6に比べてきわめて少ないという特徴が見られた。また、もものつき方も直根の肥大したものが多く、側根や不定根の肥大したものは少なかった。

ももの平均1個重は、そう苗区に比べて約半分であるが、系統群によっては、そう苗した品種と変わらないものもかなりあった。移植栽培では、もも収量

ともも個数の相関が高く、1個重との相関が低いのが普通であるが、種子播栽培では、もも収量と1個重との相関が認められ、とくに早播の場合に明らかであった。

第1表 種子まき甘しょの収量

播種期	No.	実生群名	発芽歩合 %	掘取個体数 株/a	もも個数 個/a	もも重 kg/a	対標比 %	平均1個重 g
5月15日まき	1	NF 37-3	92	676	774	84	33	108
	2	NF 38-104	31	422	521	36	14	69
	3	NF 39-5	70	549	746	38	15	52
	4	NF 39-72	50	479	591	75	30	127
	5	NF 41-6	87	591	648	89	36	138
	6	NF 41-86	77	535	704	96	38	136
	7	NF 41-109	57	338	507	37	15	72
	8	NF 41-110	70	704	943	71	28	76
	9	NF 41-122	19	324	366	47	19	127
	10	NF 41-138	54	253	422	20	8	48
	11	NF 41-145	87	648	873	87	35	99
	12	NF 41-160	64	324	394	39	16	99
標準比較		農林2号(そう苗)	63.2	487	624	60	23.8	95.9
		コガネセンガン(そう苗)	338	1689	251	100	149	201
			338	2013	395	157	201	201
6月15日まき	1	NF 37-3	63	450	619	40	15	65
	2	NF 38-104	69	605	802	54	20	67
	3	NF 39-5	82	676	788	54	20	68
	4	NF 39-72	54	338	352	45	17	128
	5	NF 41-6	60	648	788	101	38	128
	6	NF 41-86	84	690	704	76	29	107
	7	NF 41-109	74	676	816	62	23	75
	8	NF 41-110	64	507	662	57	22	87
	9	NF 41-122	27	267	282	57	22	204
	10	NF 41-138	56	493	577	51	19	88
	11	NF 41-145	56	563	676	58	22	86
	12	NF 41-160	77	479	605	41	15	67
標準比較		農林2号(そう苗)	63.8	533	639	58	21.9	90.5
		コガネセンガン(そう苗)	338	1281	265	100	207	207
			338	1788	386	146	216	216

種子播栽培でのもも個数の増加は、栽植個体数の増加によらなければならないだろうから、発芽歩合を考慮して栽植個体数をさらに増加すれば、もも収量もかなり向上する可能性が考えられる。また種子播栽培における1個重の増加は、直根肥大の旺盛な系統を育成することにより可能と考えられるので、ももの外観、品質などの改良を含めて、今後の育種的な研究問題であろう。

参考文献

- 1) 広崎・坂井(1967)：露地開花性甘しょの実用性について、日作九支報, 28。
- 2) 繁村・井口・西尾(1965)：露地開花性甘しょとその育種の利用に関する研究, 中国農試報告, A, 11。